

論題→情報化新時代における視覚障がい者の生活上の課題と支援の在り方に関する研究

副題： 若者世代が抱える課題と望む生活に関する実態調査

社会福祉学専攻 新谷裕之

要 旨

障がい者の社会参加が叫ばれて久しいが、情報化社会が進展する中で視覚にハンディのある視覚障がい者が、技術環境の進む情報端末やネット環境を活用しながら社会で活躍することには大きな障壁があると考えられる。視覚支援学校に在籍する小中高生、いわゆるZ世代に当たる子どもたちにとっても、激動する社会を生き抜くためには情報を活用することは必須の技術といえる。

本研究では、視覚障がいのある生徒と先生を対象に、日常生活の困り事と情報端末やネットの活用状況を調査し、社会参加に繋がる支援の在り方を検討する。小中学校では、文部科学省のGIGAスクール構想の推進により、視覚障がいを有する子どもたちを含む、すべての児童・生徒に情報端末が配布された為、機器に触れる機会が増えたが、その利活用に関する実態把握が第一の目的である。また、社会保障制度の中で視覚障がい者に対する支援制度が提供されてはいるものの、激変する情報化社会に対応できているかについて検討することが第二の目的である。本調査ではアンケート調査とインタビューを通して、上記の実態把握と支援体制を検討する。結果、生徒20名に調査への依頼し、7名から協力を得ることができたが、調査依頼した5名教員からはコメントのみでアンケートへの協力は得られなかった。教員の指導の下で多くの生徒は情報端末に触れる機会を得て、学内の学習等での利活用は進んでいたが、生活上の困り事として食事や更衣といった日常生活活動はリストアップされなかったことと、日常のインターネットでの調べ物やメールやチャットの利用では問題を感じていない一方で、「新情報取得」や「災害時の情報収集」、「課外活動」などの緊急事態では、とっさの際の情報検索や、屋外での移動時の道先の検索やキャッシュレス決済などの項目において同世代の子供たちの利用とギャップを感じた。情報機器の利用に関しては、読み上げ機能などネット環境が進んでいる中で、画像や動画による内容の理解、リンクなどの活用が困難で、AIなどの新規情報技術の取得に関わる、視覚障がい者のためのマニュアルや支援体制がない事にも不便さを感じていた。

Z世代に当たる視覚障がいのある生徒たちにとっても未来を生き、社会参加するためには、情報機器の端末の活用は必須の技術といえる。しかし、使いこなすための教育や支援体制が整備されているとは言えず、同世代の子どもたちとの格差が生じることが懸念される。学校においても先生方自身も視覚障がいを抱えている方もおられ、情報機器の技術習得には時間を要することから学習内での情報端末使用の指導に留まっている。情報に関する技術革新により一部の格差を埋めることができる可能性がある一方で、障がいの程度の違い（個人差）等での理解や活用の差が生じることから、教育環境（学校）や社会保障制度の中に情報技術に関して指導のできる人材を組み込み、個別のニーズに対応した支援体制を構築する必要性を感じる。